

目次

はじめに i

第1部	教室から世界へつながる	1
第1章	教室の中に社会を 大学の日本語教室と社会と人のつながりを考える トムソン木下 千尋	2
第2章	教室から社会、社会から教室へ 社会・コミュニティ参加をめざすことばの教育 佐藤 慎司	22
第3章	世界とつながる言語レパートリー トランスリンガリズムの視点からの言語教育 尾辻 恵美	44
第2部	人と人がつながる	67
第4章	先輩と後輩をつなぐ 異レベルの学習者が共に学ぶ効果について考える 毛利 珠美	68

第5章	学生と学生をつなぐ 学生はどうつながり合い、そこからどう学んでいるのかを考える	87
		島崎 薫
第6章	インターネットでつなぐ 学習者と母語話者が教室外で共に学ぶ効果について考える	106
		クリステンセン井関 資子
第3部	世代や国境を越えてつながる	127
第7章	世界をつなぐ日本語のアーティキュレーション	128
		當作 靖彦
第8章	家族と世代をつなぐ継承語教育	149
		片岡 裕子・ダグラス 昌子
第9章	次世代をになう大学院生ネットワーク 縦糸と横糸を編んでつながる	171
		島崎 薫・小島 卓也
第10章	オーストラリアと世界をつなぐ オーストラリアの日本語教育の今	189
		ロビン・スペンス ブラウン

第4部	人とつながり、世界とつながる日本語教育	211
第11章	つながりのもたらすもの	212
	トムソン木下 千尋	
	執筆者紹介	230

教室の中に社会を

大学の日本語教室と社会と人のつながりを考える

トムソン木下 千尋

1. はじめに

私はオーストラリアの大学で日本語教育を行っています。私の携わる日本語教育は、大学という場からも、オーストラリアという社会的文脈からも切り離して語ることはできません。つまり、私の担当する日本語授業の教室は、大学とつながり、オーストラリア社会とつながっていて、同時に、その教室の中では学習者たちがお互いにつながりあって、日本語を学習しているのです。本章では、つながりあう日本語教育の実践例を紹介しながら考察し、教室の中での、そして教室と外の社会とのつながりを提案します。その議論を行うために社会文化理論の考え方のいくつかを紹介します。

2. 「つながり」のはじまり

1993年にオーストラリアのニューサウスウェールズ大学（UNSW）に赴任した私は、新しい環境で学習者の数の多さに戸惑いながら、新しく同僚となった先生方とUNSWの日本語プログラムのあり方を模索していました。そして、同時期に、娘がオーストラリアの公立小学校に通い始めました。その小学校で出会ったのが「ピア・サポート」という制度です。入学したての小さい子供たち一人ひとりに、6年生のお兄さん、お姉さんが「ピア・サポート」として付いてくれるのです。大きな小学校で右も左もわからない小さい子供に、毎朝同じお姉さんが「ハロー」と声をかけてくれる。これほど心強いことはないでしょう。ここでお姉さんと「つなが

教室から社会、社会から教室へ

社会・コミュニティ参加をめざすことばの教育

佐藤 慎司

1. はじめに

どんな教室も日本語プログラムも、それを取り巻く社会文化的環境、たとえば、学校や地域のコミュニティ、地方自治体（教育委員会など）や国、また、関連学問分野の動向などの影響を受けています。たとえば、ある教師の行う日本語の授業は、学生のニーズ、プログラムの目的、学校の使命、国の方針、また、応用言語学や言語教育学など、それを取り巻く社会文化的な環境、また、歴史的な環境から常に影響を受けています。私はアメリカで教えていますので、アメリカのことしか語れませんが、歴史的にアメリカの日本語教育は日本研究の要望に応える、つまりアジア研究の日本研究専攻の学生に必要な日本語能力を育てていくということを第一の目的にした場合が多かったようです。しかし、日本語プログラムは、多くの場合、アジア研究学部の中に存在するだけでなく、その学部は大学の中に、さらに大学はさまざまなコミュニティの中に存在することを考えると、アジア研究学部のニーズに応えるだけでなく、大学やさまざまな関連コミュニティのニーズに応えることも必要になってきます。また、日本語を学習する学習者のニーズももちろん考慮に入れなければなりません。しかし、日本語教育はこれらの関係機関、また、学習者のニーズに応えるだけでよいのでしょうか。

本章では、まずアメリカを例にとり、いかに日本語のプログラムがそれを取り巻く社会文化的な環境、また、歴史的な環境から常に影響を受けているのかを考察したいと思います。まず、そのために日本研究・日本語教

世界とつながる言語レパートリー

トランスリンガリズムの視点からの言語教育

尾辻 恵美

1. はじめに

第1章のトムソンの論考では、教室と社会をつなげる日本語教育論が展開されました。その論考は、さまざまな言語レベルや社会文化背景を持った学生がつながり、多種多様なリソースにアクセスしながら協働的にピア・サポートする過程で、教室の中に社会性を構築することができるという理念に基づいていました。第2章の佐藤の論考では、実際に教室の外のコミュニティに出て、ことばを使って創造的に社会に関わる言語教育実践を推奨しました。本章では、教室と社会のつながりをさらに世界へと発展させたいと思います。教室・社会・世界は複雑に絡みあっていて、単純に2元的、3元的には捉えられないものです。教室が社会を反映するというより、教室そのものが社会であるというトムソン（本書第1章）や、日本語教育を通して社会やコミュニティにも影響を与えていこうという佐藤（本書第2章）の提唱を世界レベルへとさらに発展させると、教室は世界そのものであり、学習者も協働的、創造的に、そして積極的に多言語世界に関わっていく主体でなくてはいけないという議論になると思います。本章では、日本語「を」習得するというモノリンガル（単一言語）的な視点から脱却し、日本語を含む世界の言語資源とのつながりの中で、創造的に、そして協働的に言語活動に従事する人間を育成することをも視野に入れた言語教育が必要ではないかと提案します。

オーストラリア、イギリスやアメリカなど多民族化が著しい国とは事情が違って、日本ではやはり「日本語」が主流だという意見をよく耳にしま

先輩と後輩をつなぐ

異レベルの学習者が共に学ぶ効果について考える

毛利 珠美

1. はじめに

私はオーストラリアの大学で日本語教育に携わってきましたが、中上級レベルに達しても、なかなか日本語を話せない・話さない学生がいることが長年の悩みでした。そこで、数年前に、ニューサウスウェールズ大学 (UNSW) の大学院修士課程で、日本語教育学を勉強することにしました。これが、私と UNSW の日本語プログラムとの「つながり」のきっかけとなりましたが、最初は驚くことばかりでした。大学1年生の講義を見学に行くと、担当教員と1年生以外に、さまざまな学びの支援スタッフがいました。先輩の学生、セミナーやチュートリアル担当の先生方、日本人留学生、大学院生などが1年生のサポートのために大講堂で活発に動き回っていました。また、同時に、ジュニア先生と呼ばれる先輩学生の日本語力の高さにも驚きました。この場合の日本語力というのは、流暢さや文法的な正確さだけではなく、日本語をコミュニケーションの道具として積極的に使えるという意味です。彼らの役目は、先生のお手伝いや後輩の学びの支援をすることなのですが、とにかく日本語を積極的に話すのです。この経験から、自分の研究対象をジュニア先生の活動に決め、彼らがどうやってこのように高い日本語力を身につけたのかを探ることにしました。

本書第1章でも説明されましたが、ジュニア先生プロジェクトのひとつの目的は、中上級レベルの学生たちに生きた日本語を使う機会を提供することです。(Thomson, 1998)。日本以外の国で外国語として日本語を学ぶ学生にとって、「生きた」日本語を使う機会が少ないということは大き

学生と学生をつなぐ

学生はどうつながり合い、そこからどう学んでいるのかを考える

島崎 薫

1. はじめに

今まで日本語教育をはじめとする言語教育の分野では、教室の中での学びや習得過程の研究を盛んに行っていました（Benson, 2009）。ですが、教室の外で学習者たちがどのようなリソースに触れる機会を持ち、どのようにそのリソースを使っているのかなどは、あまり研究されてきませんでした（Benson, 2009）。当たり前のことですが、日本語学習者は生活の大半を教室の外で過ごしています。そこで私は、オーストラリアの日本語学習者の教室外での日本語使用についてインタビュー調査を行いました（島崎, 2011）。学習者たちは、ドラマ、アニメ、音楽を日本語で楽しむだけでなく、日本人の友達と E-mail でやりとりしたり、ソーシャルネットワークサイトに日本語で書き込みをしたり、中には日系の美容院に行って日本の雑誌を見て、その雑誌の日本人のモデルを指差しながら、日本人の美容師さんになりたい髪型のイメージを日本語で伝え、髪を切る間日本語で楽しくおしゃべりする学習者もいました。そのインタビュー調査の中で何度か「教室の中よりも教室の外で多く日本語を学んできた」という話を聞きました。さらには「教室の中で学ぶ日本語は役に立たない」とまで言う学習者もいました。当時、日本語教師を目指す一大学院生だった私は、正直とてもショックでした。そこから私は、「では学習者たちは教室の外でどのように学んでいるのだろうか」と考えるようになりました。

この疑問を解決しようと、オーストラリアのある大学の日本語や日本文化に興味がある学生のクラブで学習者がどのように日本語を学んでいるの

インターネットでつなぐ

学習者と母語話者が教室外で共に学ぶ効果について考える

クリステンセン井関 資子

1. はじめに

私は、1980年よりオーストラリアで日本語教育に携わってきました。はじめは、シドニーにある小・中・高一貫教育の学校で日本語を教え、大学の夜の講座も担当していました。今のように教材にも恵まれていなかったため、日本語教師達皆で力を合わせてカリキュラム開発や教材開発にエネルギーを注いでいました。まさに先生方の強い「つながり」で教材が作られ、授業をしていたように思います。そして、1990年、地方の大学が日本語講座を開設することになり、さらに、コンピューターによる日本語教師養成コースを作り、その教材開発の仕事もすることになりました。これが、私が、Computer Mediated Communication (CMC) の研究に興味をもったきっかけとなりました。それと同時に、シドニーのような大都会での日本語教育と地方での日本語教育に大きな差があることも、地方に住み、はじめて実感しました。そして、いつか日本語学習者達と日本語教育に関心のある方達が「つながり」、どこにいても日本語を学び／教え続けることができたらいいのにと夢のようなことを願っていました。

今や、インターネットが私達の日々の生活に浸透し、学生達は、スマートフォンを使って Social Network Site (SNS) などでコミュニケーションを楽しむような時代となりました。そして、私の中で長い間くすぶり続けていた火種に火が付き、SNS を活用して日本語学習者と母語話者をつないだ日本語学習の場を作れないだろうかと考えはじめました。こうして私が長年温めていた夢が、博士課程の研究プロジェクトへとつながっていき

世界をつなぐ日本語のアーティキュレーション

當作 靖彦

1. はじめに

Education is all a matter of building bridges と言ったのはアメリカの小説家・文芸評論家の Ralph Ellison ですが、教育とはいろいろな橋を作って、つながりを拡げていくことでしょう。このつながりには、本書の各章で述べられているような学習者と社会のつながり、学習者と人のつながり、学校同士のつながり、教育内容と実社会のつながりもあれば、教師養成と教育実践のつながりなど多様なものがあります。しかし、Ellison の言葉に反し、現代の教育では、橋ではなく、壁を作っていることのほうが多いのではないのでしょうか。学習者に与える試験の内容が現実社会とは乖離し、学習したことが社会に出て全く役に立たなかったりするのは、教育が作っている壁のいい例でしょう。

教育の歴史を振り返ると、アーティキュレーション（連関）の欠如は大きな壁になってきました。アーティキュレーションとは一般に、ある教育レベルと次の教育レベルのカリキュラム、すなわち、教育目標、内容、評価の間のつながりを指しますが、異なる教育機関はおろか、同じ教育機関の中でも、レベル間でつながりがないことが多く見られ、教育が解決すべき重要な問題となってきました。

日本語教育グローバルネットワークは世界各国の日本語教育関係の学会が集まったものですが、2011年から世界各地で日本語教育におけるアーティキュレーション達成のための J-GAP (Japanese Global Articulation Project) と呼ばれる活動を行ってきました。本章では、この活動につい

家族と世代をつなぐ継承語教育

片岡 裕子・ダグラス 昌子

1. はじめに

アメリカで継承語教育がようやく政府、教育機関、研究者の注目を浴びるようになり13年が経ちました。まだ13年という捉え方もありますが、それまでは移住者の国であるアメリカで、その移住者の言語である継承語が公の場で取り上げられたことがなかったことを考えると、これは歓迎すべき変化です。けれども、政府の助成金を含めた公共のサポートという点から個々の継承語を見ると、その扱いは異なります。継承日本語教育は、日本語がアメリカ政府の分類では最重要言語に入らないので、公共のサポートが増えたわけでもなく、依然公共教育の枠外で、保護者の子どもへの思いから作られた日本語学校を主体として行われています。アメリカのみならずオーストラリアでも、「資金がない、教材がない、トレーニングを受けた教師がない」の「ないないづくし」(Sasaki, 2001)の継承日本語教育は試行錯誤で行われてきました。国により、また地域により継承日本語学習者のニーズに違いがあることもありますが、この13年間の私たちの試行錯誤から生まれたものを、アメリカ、オーストラリアをはじめ各国・各地域で日本語を次の世代に継承するために奮闘されている保護者および継承日本語教育に携わる教員やスタッフの方々と共有することで、そこに「つながり」が生まれればという思いで本章を書きました。

なお、2014年の日本語教育国際研究大会では、継承語話者サポートワークショップということで4つのセッションに分けて以下の発表を行いました。継承日本語話者・継承日本語教育とその支援のための提言、カリ

次世代をになう大学院生ネットワーク

縦糸と横糸を編んでつながる

島崎 薫・小島 卓也

1. はじめに

「入院おめでとう」。日本の大学院の入試に合格した時に大学院生の先輩から冗談でこう言われたことがあります。病院で24時間過ごす入院患者のように、大学で多くの時間を過ごし、研究に専念するのが大学院生だぞ、がんばれというメッセージを伴った少し意地悪な激励の言葉だったのだと思います。大学院では授業を履修するだけでなく、修士論文、博士論文の執筆に向けてどんどん自分で研究を進めていかなければなりません。研究が進むにつれて自分の研究のみに集中しがちになります。また専門性が増せば増すほど、自分とよく似た分野を扱っている指導教員と同じゼミ・研究室以外の人たちとは接点を持つことが少なくなり、どうしても視野が狭くなりがちです。オーストラリアの大学院生もよく似た状況にあります。特に、オーストラリアの大学にはゼミや研究室というものがなく、研究だけをする大学院生は授業を履修しなくてもいいので、人と人の「つながり」をつくるということが難しく、大学院生は孤立しがちです。

このような状況の打開に少しでも貢献しようと、2014年シドニー日本語教育国際研究大会（以下、国際研究大会）では、初めての試みとして大学院生が主体的に企画・運営する「つながり」をテーマにした大学院生ワークショップを実施しました。このワークショップは、今回企画・運営にあたったニューサウスウェールズ大学（以下、UNSW）の大学院生が運営している勉強会での「つながり」の経験をもとにしてデザインし、行われました。本章では主に、そのワークショップの目的とさまざまな仕掛

オーストラリアと世界をつなぐ

オーストラリアの日本語教育の今

ロビン・スペンス ブラウン

1. はじめに

私は 1970 年代の半ば、17 歳の交換留学生として一年日本に滞在し、翌年オーストラリアに戻って、大学で日本語を専攻しました。卒業してからずっとオーストラリアで日本語を教え、日本語教育についての研究もしてきました。考えてみれば、学習者、教師、研究者としてオーストラリアの日本語教育を 40 年も生きてきたのです。そして、日本語教育が私と日本をつなぎ、世界中の日本語教育にかかわる仲間とつないでくれました。この経験をもとに、本章ではオーストラリアにおける日本語教育の歴史を振り返り、現在の状況を形成してきた多様な要因について考察し、日本語教育が今どのような課題に直面しているかについても検討したいと思います。世界の日本語教育が共有している課題もあれば、オーストラリア特有の問題もありますが、本章が世界の日本語教育の課題を一緒に考えて、アイデア交換をするための一つの資料になることを願っています。

2. オーストラリアの教育制度

オーストラリアは 6 つの州と 2 つの特別準州（テリトリー）の連合体です。初等、中等教育の主な責任は州にあります。連邦政府は国の方針につながる特定の教育プログラムのために補助的な資金を提供しています。アジア言語教育には、この補助金が強く影響してきました。

カリキュラムも、基本的には州が作成していますが、数年前からオーストラリア全国統一カリキュラムの開発が始められました。日本語のカリ

つながりのもたらすもの

トムソン木下 千尋

1. はじめに

本書をここまで読まれたみなさんは今、日本語教育をどう捉えているでしょうか。本書「はじめに」で、日本語教育は人が行う社会的な営みであること、そして、日本語教育は社会に影響を受け、そして社会に影響を与える存在であることを述べました。今、各章を振り返ると、それぞれの実践が「人とつながり、世界とつながる日本語教育」にそれぞれの形で取り組んでいることが分かると思います。しかし、人と人とがつながり、そして世界がつながるような日本語教育の実践とは、総じて、実はそれにかかわるみなさんがいろいろなレベルでつながることを学ぶ教育の実践だと言えるのではないのでしょうか。つまり、従来の文法事項、語彙、表現、談話、言語機能などを切り離して学習目標としてきた日本語教育より、一回り、あるいは二回り大きく日本語教育を捉え直す実践です。本章では、本書全体を振り返り、「人とつながり、世界とつながる日本語教育」を再考してみたいと思います。

2. 複元的な「つながり」

本書では各章で各筆者が自分の立ち位置からさまざまな壁を越えた「つながり」を論じてきました。章によって「つながり」の意味も、「つながり」が扱う範囲も違う場合があるように思えます。

たとえば、第4章と第7章を見てみましょう。第7章（當作）ではアーティキュレーションという「つながり」が論じられました。1つのプロゲ